九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

J・W・ジョンソン『元黒人の自伝』と「二重意識」

小谷, 耕二
九州大学大学院言語文化研究院

https://doi.org/10.15017/1654316

出版情報：言語文化叢書. 9, pp.27-35, 2004-02-20. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

J・W・ジョンソン『元黒人の自伝』と「二重意識」

小 谷 耕 二

I

James Weldon Johnson の *The Autobiography of the Ex-Colured Man*（『元黒人の自伝』）は、「自伝」という表題ではあるが、実はフィクションである。最初 1912 年に匿名で出版されたあと、1927 年に新版が出、当時の所謂「ハーレム・ルネッサンス」を代表する作品の一つという声価を得ている。作者ジョンソンはきわめて多面的な顔をもつ人物であった。1871 年にフロリダ州ジャクソンヴィルで黒人中流家庭に生まれ、アトランタ大学に学び、卒業後さまざまの活動に従事している。故郷ジャクソンヴィルのハイスクールの校長、日刊新聞の創設者兼編集者、弁護士という経歴に加えて、セオドア・ローズベルト政権下ベネズエラとニカラグアでアメリカ合衆国領事を歴任した。その一方、芸能、文学の分野では、弟 John Rosamond や友人 Bob Cole とともにチームを組んでミュージカル用の歌の制作にあたり、後年は自作の詩のほかに、黒人の詩や黒人霊歌集を編集している。NAACP（全国黒人地位向上協会）の幹事としても活動し、組織の拡大に力を尽くすとともに、黒人問題に関して数多くの論説を発表した。小説『元黒人の自伝』のほかに、代表的な著作に、英語自体は標準英語でありながら黒人特有の表現様式の詩的実験でもある詩集 *God's Trombones*（1927）、それにこちらは正真正銘の自伝 *Along This Way*（1933）がある。

『元黒人の自伝』はフロリダで弁護士業を営んでいた際にパートナーだった Judson Douglas Wetmore をモデルにしたといわれている。この人物はアトランタ大学時代の旧友で、ミシガン大学のロースクールでは白人として「通って」おり、二人の白人女性と結婚したという（Gates,Jr. vi-vii）。ジョンソンが白人と黒人のカラーラインを跨いだこうした人物を取りあげて、そのフィクショナルな自伝を書いた狙いはどこにあったのか。黒人によるフィクショナルな自伝といえば、たとえば現役の男性黒人作家 Ernest Gaines の *The Autobiography of Miss Jane Pittman* の名がすぐ思い浮かぶ。この作品は、南北戦争の時代から公民権運動の時代までを生き抜いた架空の老女が物語る自伝という形式を取って、アメリカ南部の歴史を黒人女性の視点から書き直そうとする試みだった。史実と虚構の境界線の撹乱という側面をもっており、その点では虚構意識の色濃いポストモダン的な作品であった。別の例をあげれば、Ralph Ellison は *Invisible Man* において、ニューヨークの地下のあなぐらに隠れ住む名前のない黒人の一人称による語りという物語装置をとおして、白人にとって「見えない」虚構の存在となっている黒人の状況を象徴的に浮かびあがらせた。『元黒人の自伝』の場合、その虚構の意識は人種間の境界の「パッシング」というテーマにどのように関わっているのか。このテーマに関しては、同時代の「ハーレム・ルネッサンス」の作家 Nella Larsen が、そのものずばりのタイトルの *Passing* という小説を書いている。また白

人作家の側からは、*Pudd'nhead Wilson* において Mark Twain が「黒い血」にまつわるトラジコミックな「とりかえばや物語」を推理小説仕立てで作品化して見せたし、William Faulkner はカラーラインに暴力的に挑む悲劇的人物像を Joe Christmas のなかに見事に造型した。こうした文脈のなかに置いてみると、『元黒人の自伝』はエスニシティに関わるさまざまな問題系を内に宿しており、かなり広い主題上の射程をもっていることがわかる。小論では、上述の疑問等を念頭に置きつつ、形式と内容における虚構性を手がかりにして、この作品の狙いや意義を考えてみたい。

II

20 世紀初頭 1903 年に、W.E.B. Du Bois は 20 世紀の問題は、「皮膚の色の境界線（カラー・ライン）の問題だ」と宣言した。アメリカにおける、その後の黒人問題の展開、すなわち公民権運動や昨今の多文化主義の隆盛等を思い浮かべると、この宣言の予言性には目を見張るものがあるが、デュボイスはその記念碑的著作の中で、黒人の置かれた存在境位について次のように述べている。

> アメリカの世界――それは、黒人に真の自我意識をすこしもあたえてはくれず、自己をもう一つの世界（白人世界）の啓示を通してのみ見ることを許してくれる世界である。この二重意識、このたえず自己を他者の目によってみるという感覚、軽蔑と憐びんをたのしみながら傍観者として眺めているもう一つの世界の巻尺で自己の魂をはかっている感覚、このような感覚は、一種独特なものである。彼はいつでも自己の二重性を感じている。――アメリカ人であることと黒人であること。二つの魂、二つの思想、二つの調和することなき向上への努力、そして一つの黒い身体のなかでたたかっている二つの理想。しかも、その身体を解体から防いでいるものは、頑健な体力だけなのである。
>
> アメリカ黒人の歴史は、この闘争の歴史である。すなわち、自我意識に目覚めた人間になろうとする熱望、二重の自己をいっそう立派ないっそう真実の自己に統一しようとする熱望の歴史なのである。（デュボイス　15-16）

ここに指摘された「二重意識」の含意は見かけほど単純ではない。「アメリカの世界」は白人の世界であり、そこでは黒人は白人の目をとおしてのみ自己を見ることを強いられる。黒人としての自己がありのままに存在しえず、したがってつねに疎外の感覚を伴わざるをえない世界である。その意味で、この「二重意識」は、自己のなかに白人の世界と黒人の世界が共在していることへの自覚であるだけではなく、黒人の存在自体が白人のまなざしによって構築されたものであり、その構築された自己像と本来の自己とがズレているという感覚を指してもいる。この二重の自己が統一されるところに、デュボイスは「いっそう立派ないっそう真実の自己」というものを想定しているわけだが、それが達成される場所はアメリカでなければならない。しかもそれは「白人世界ではない」アメリカということになろう。つまり、ここでは「アメリカの世界」も二重性を宿したものであると考えられる。

ジョンソンはデュボイスのこの洞察を基本的にほぼそのまま受け入れている。少年時代に自分

が黒人であることを知って以来、ジョンソンは自分が別の目で世界を見るようになり、「ひとつのの支配的な、すべてを覆いつくす考えによって、自分の思考が色づけられ、言葉が規定され、行動が制限された」と述べたあと、次のように続けている。

> And this is the dwarfing, warping, distorting influence which operates upon each and every coloured man in the United States. He is forced to take his outlook on all things, not from the view-point of a citizen, or a man, or even a human being, but from the view-point of a *coloured* man. It is wonderful to me that the race has progressed so broadly as it has, since most of its thought and all of its activity must run through the narrow neck of this one funnel. (Johnson 20-21)

さらに、黒人が本当に考えていることを白人が知ることは困難であることを指摘して、こう述べている。

> This gives to every coloured man, in proportion to his intellectuality, a sort of dual personality; there is one phase of him which is disclosed only in the freemasonry of his own race. I have often watched with interest and sometimes with amazement even ignorant coloured men under cover of broad grins and minstrel antics maintain this dualism in the presence of white men. (Johnson 21-22)

最初の引用で、「黒人が黒人の視点からすべてを見ることを強いられる」とあるのは、「白人の世界によって規定された」ステレオタイプ的な黒人の視点ということであろう。だが同時に、黒人は自分たちだけにしかわからない世界をひそかに隠しもっており、そのことが彼らに一種の優位性の感覚を与えていると読める。

ヘンリー・ルイス・ゲイツは、このデュボイスの「二重意識」の反響に注目し、黒人であると同時に白人でもある人物を造型することによって、ジョンソンはカラーラインの虚構性を暴露し、無効化しているのだという評価を下した（Gates, Jr. vi-viii)。しかし、『元黒人の自伝』に結果的にそのような効果を生みだす可能性がないわけではないにしても、白人として生きる道を選ぶという「元黒人」の最終的な決断と、それに伴う結末の屈折した意識は、ゲイツのような積極的な評価にストレートに結びつくものであるとは思えない。デュボイスの「二重意識」の変奏を作品中にいま少し仔細にたどってみる必要がある。

III

「二重意識」の変奏をこの作品の虚構意識に見てとることは、それほど牽強付会ではないであろう。そもそも「自伝」と称しながら、その主人公＝語り手の名が明かされることはないし、生まれた土地の詳細や生年も明らかにされない。主人公＝語り手は白人の父親と黒人の母親のあいだに生まれているが、その両親をはじめ、「元黒人」が交渉をもつ主要な人物も名は伏せられたま

まである。本来自伝というものがみずからの来し方を顧みることによって、主人公＝語り手が自己のアイデンティティを確認する機能をもつものであるとするならば、この奇妙な匿名性は、Valerie Smithの指摘するとおり、自伝のジャンルをひそかに突き崩すものであろう(Smith 89)。つまり自伝を装いながら自伝ではないともいえる。この偽装の意識は、主人公＝語り手の造型に本質的に関与していると考えられる。『元黒人の自伝』がある友人をモデルとしておりジョンソン本人の生涯を忠実にたどったものではないことは先に述べたが、その叙述の節目節目に出来する唐突ともいえる物語の展開（学資の盗難と大学入学の放棄、葉巻工場の突然の倒産とその後のニューヨークへの移住、殺人事件との遭遇とヨーロッパ逗留等）も、ピカレスク風に波乱万丈であり、作者の強い虚構操作の意識を感じさせる。

作品に瀰漫する虚構性という観点から見たときに、「元黒人」のある内面的特性がひときわ明るく照らし出される。黒人であることを知ったあと、彼は鏡を見て自分の姿を確認する。そのとき彼の目に映ずるのは黒人の姿ではなく、美しく魅力的な白人少年としての容貌である。

> I noticed the ivory whiteness of my skin, the beauty of my mouth, the size and liquid darkness of my eyes, and how the long, black lashes that fringed and shaded them produced an effect that was strangely fascinating even to me. I noticed the softness and glossiness of my dark hair that fell in waves over my temples, *making my forehead appear whiter than it really was.* (Johnson 17; my italics)

ヴァレリー・スミスはこの一節に、黒人としてのアイデンティティを受けいれることができない、「元黒人」の特性を読みとっている（Smith 96)。その解釈をもう一歩押し進めれば、「実際よりも額が白く見えた」という言いまわしは、そこに白人の姿を見てとりたいという願望の存在を暗示していると読める。そしてこの願望は周囲の黒人に対する見下すような距離感と表裏一体となっている。主人公＝語り手は、黒人であることを意識する以前は、まわりの肌の色の黒いあるいは褐色の少年少女に特別好悪の感情をもっていなかったのだが、その後彼らと一緒に分類されることにきわめて強い嫌悪感を抱くようになったと述懐している（Johnson 23)。彼は無意識裡に白人であることを望み、逆に黒人であることを忌避するのである。この自己忌避は一種の無意識の詐術であり、物語のレヴェルでの虚構操作や偽装意識に通じるものであろう。そして究極的にはリンチ事件目撃後の彼の反応と、それに続く白人として生きる選択につながっていくのだが、その前に「元黒人」と独身の百万長者との関係を見ておこう。

IV

読み書き能力の習得が人生を切り開いていくもっとも重要な手段となるというモチーフは、奴隷体験記以来の黒人による物語の定石だが、『元黒人の自伝』においてもそのパターンは顕著に見られる。幼少年時代を叙述した部分では、ご多分に漏れず主人公＝語り手の読書体験が披露され、聖書に始まってジョン・バニヤンの『天路歴程』、パーレイの『アメリカ合衆国史』、グリムの童話、さらには『自然神学』というタイトルの著作まで名があがっている。また主人公＝語り手は

外国語の才能があるようで、ジャクソンヴィルの葉巻工場ではスペイン語を習得し、一般の工員よりも給与の高い仕事を手に入れ、パリ滞在中にも短期間でフランス語を習得している。しかしこの小説に特徴的なのは、読み書き能力や外国語の習得にもまして音楽がきわめて重要な役割を果たしていることである。裕福な父から贈られたピアノで主人公＝語り手は天賦の才を発揮する。音楽の才能は生計を立てる手段となり、彼はそれにより経済的苦境を脱する。ニューヨークの歓楽街である百万長者と出会い、賭博に明け暮れる生活に終止符を打ち、二人でヨーロッパに赴くことになったのも、ピアノの演奏が機縁であった。一面では『元黒人の自伝』は音楽による一種の成功物語ともいってよい。

主人公＝語り手は、ピアノの演奏について幼い頃から「音符に邪魔されることを好まず」「つねに楽曲を解釈しようとし、つねに感情をこめて演奏した」と述べている（Johnson 9, 26）。演奏中涙をこらえることができないこともしばしばで、ときには母の腕のなかに飛びこんですすり泣いたこともあったという（Johnson 27）。また他人の伴奏をするのが嫌いで、それは自分の解釈がつねに余りにも独創的だったからだと述べている（Johnson 29）。こうした箇所には、みずからの音楽の才が本能的な、あるいは自然発露的なものであり、芸術的創造性を伴う類のものであったことを匂わせようとする意図が透けて見える。さらに後年、ベルリンで百万長者の友人が開いたコンサートで古典をラグタイム風に演奏して見せたときに、あるドイツ人が彼の弾いたラグタイムをクラシック風に弾いたのを聴いて驚愕し、年来の夢を叶えたいという欲求が湧きあがってくる。

> I made up my mind to go back into the very heart of the South, to live among the people, and drink in my inspiration firsthand. I gloated over the immense amount of material I had to work with, not only modern rag-time, but also the old slave songs—material which no one had yet touched. (Johnson 142-143)

かつてハイスクールの卒業式で、主人公＝語り手は黒人の友人 Shiny の卒業スピーチに感銘を受け、黒人としての誇りが湧きあがってくるのを感じたことがあった。そして偉大な黒人、偉大な人物となって自分自身だけではなく黒人全体に名声と栄光をもたらしたいという野心を抱いたことがあった。ドイツ人の演奏に触発された長年の野心とは、この少年時代の夢のことをさしていると考えられる。彼はみずからの音楽の創造性の源泉を黒人民衆のなかに求めていきたいと思うのである。

こうして主人公＝語り手はみずからの音楽の天賦の才を黒人全体の民衆的遺産、さらには黒人であることの誇りに結びつける。先に触れたように、音楽のモチーフから見ると、それが経済的余裕をもたらすものであったことも相俟って、「元黒人」の物語の成り行きは音楽による自己実現という一種の成功物語の様相を呈してくる。しかし、ここでもアイロニーの一捻りが加えられる。主人公＝語り手は百万長者の友人の了解を取りつけ、ひとり帰国し、夢の実現に向けて南部に向かうが、リンチ事件に遭遇することによって夢はあっけなく潰えることになる。ここまでの成功物語の外貌はあくまでも外貌であって、それが可能であったのは百万長者の友人と彼とのあいだ

の主従関係が基盤にあってのことだといえる。主人公＝語り手は友人とのあいだに人種的な相違が問題となることはなかったと述べているが（Johnson 145）、Robert E. Fleming はこの二人の関係を主人対奴隷の関係を暗示するものとして解釈している（Fleming 93）。いわば物語が二重構造になっており、音楽による自己実現の夢を語りながら、一方で昔ながらの主従関係の反復が匂わされているのである。もう一歩踏みこんで言うならば、成功物語の外貌はひそかに展開する別の物語の偽装となっているとも考えられる。

V

南部での黒人の民衆音楽探索の旅の途中、ジョージアで主人公＝語り手はリンチ事件を目撃する。この出来事が白人として生きる決断の直接的な契機となっている。同時にそれが「二重意識」に根ざした偽装を引き剥がすことにもなる。生きたままの黒人が火あぶりにされるという残虐な出来事を目撃したあとの主人公＝語り手の反応は、次のように記される。

> A great wave of humiliation and shame swept over me. Shame that I belonged to a race that could be so dealt with; and shame for my country, that it, the great example of democracy to the world, should be the only civilized, if not the only state on earth, where a human being would be burned alive. (Johnson 187-189)

> All the while I understood that it was not discouragement or fear or search for a larger field of action and opportunity that was driving me out of the Negro race. I knew that it was shame, unbearable shame. Shame at being identified with a people that could with impunity be treated worse than animals. For certainly the law would restrain and punish the malicious burning alive of animals. (Johnson 190-191)

この場面に関してロバート・フレミングは、主人公＝語り手がリンチの犠牲者に対してかわいそうだという気持ちを感じていないように見えること、またリンチを行った白人に対して敵意を感じていないことを指摘し、違和感を表明している（Fleming 94）。その違和感は無理もないことである。怒りを通り越してしまうほどの衝撃だったのだといえばいえようが、それにしても恥辱のみが前面に出てくることには戸惑いを禁じえない。この戸惑いを解消する唯一の解釈は、主人公＝語り手が当初から黒人であることを忌避し、無意識裡に白人になりたいと願っていたのだということになろう。偽装の意識は実は自分自身に向けられたものであり、彼はそのひそかなどす黒い願望を自分自身から隠そうとしていたのだとみてよい。

いったん白人になることを決意すると、「元黒人」はあらゆる機会を利用して白人の世界における成功、すなわち金儲けになりふりかまわず邁進する。これは音楽による自己実現という偽装の成功ではなく、預金の残高が確実に増えていくことによって可視化される成功である。そして彼は白人女性と結婚し、子供も生まれ、幸福を手に入れる。

しかし、「元黒人」は自分の選んだ道に一抹のうしろめたさを感じてもいる。「千ドルまで貯め

ることができた日は、わが生涯の一時期を画する一日だった」(Johnson 195) という大げさな述懐には、自暴自棄の気味のあるアイロニカルな響きを聴き取ることができるであろう。また彼は、本当のところ自分は黒人ではなかったのだと思うこともあると述べる一方で、ときには自分が「臆病者、脱走兵」であって、黒人に対する奇妙な憧憬を感じることもあると告白している (Johnson 210-211)。さらに黒人の大義のために公然と闘っている人々を前にすると、自分が卑小で利己的で、ただ小金を儲けることに成功しただけに過ぎず、彼らこそ歴史を動かし、一つの人種を創りあげているのだと述懐するのである。『元黒人の自伝』の結末の一節はこうである。

> My love for my children makes me glad that I am what I am and keeps me from desiring to be otherwise; and yet, when I sometimes open a little box in which I still keep my fast yellowing manuscripts, the only tangible remnants of a vanished dream, a dead ambition, a sacrificed talent, I cannot repress the thought, after all, I have chosen the lesser part, that I have sold my birthright for a mess of pottage. (Johnson 211)

「急速に黄ばんでいく草稿」は真実の自己実現でありえたかもしれぬもう一つの生き方があったことを指し示してはいるが、同時にそれは紛れもない偽装の抜け殻でもある。うしろめたさを感じるとはしても、そのカムフラージュのもとで「元黒人」はひそかに望んでいたものを手に入れたのであり、それを今となって手放すことはない。「一杯のポタージュ」とは創世記を出典とする、高価な犠牲を払って得た物質的利益を意味するが、意地悪な見方をすれば、この一節は「一杯のポタージュ」が保証された場所から発せられているとも言えなくもないのである。

VI

ここまでデュボイスの「二重意識」の変奏を、『元黒人の自伝』の物語構造や主人公＝語り手の造型における偽装のモチーフに探ってきた。ここで注意しておかねばならないのは、主人公＝語り手すなわち作者ジョンソンではないということである。ジョンソン自身の思考や感情がどれくらい主人公＝語り手に投影しているかは簡単には判断できない。ただジョンソン自身は「元黒人」にアイロニカルな距離を保っていることは明らかである。デュボイスはアメリカの黒人の歴史に「二重の自己」を「いっそう真実の自己」に統一しようとする熱望の歴史を見ていた。その歴史が繰り広げられる場であるアメリカに関しても、白人の世界としてのアメリカから、新たなアメリカの姿を構想していたといえるだろう。一方、「元黒人」は「いっそう真実の自己」を求める闘いを放棄した。ここで冒頭に提出した疑問に帰れば、それではジョンソンはなぜそのような人物の物語を「自伝」を偽装して書いたのであろうか。考えられるひとつの答えは、そうした物語を書くことによって一種悪魔祓い的にそれを超越しようとしたのではないかということである。「自伝」という形で、みずからの物語として語ることで、自分のなかの「元黒人」的要素を代償的に葬り去り、そこから自由になろうとしたといえるのではなかろうか。仮にそうだとして、みずからの影の部分から自由になることが「いっそう真実の自己」の実現に帰着するものかどうかは、速断はできないであろう。しかしジョンソンにとって、それは黒人の「二重意識」の統一に向け

てのひとつの試みであったとは言えるかもしれない。

参考文献

Bell, Bernard W. *The Afro-American Novel and Its Tradition.* Amherst: The Univ. of Massachusetts Pr., 1987.

Fleming, Robert E. "Irony as a Key to Johnson's *The Autobiography of an Ex-Coloured Man.*" *American Literature* 43 (March 1971): 83-96.

Johnson, James Weldon. *The Autobiography of an Ex-Coloured Man.* 1927. rpt. New York: Vintage, 1989.

Johnson, James Weldon. *Along This Way: The Autobiography of James Weldon Johnson.* 1933. rpt. New York: Da Carpo Press, 2000.

Payne, Ladell. "Themes and Cadences: James Weldon Johnson, 1871-1938." *Black Novelists and the Southern Literary Tradition.* Athens: University of Georgia Press, 1981. pp. 26-37.

Skerret, Joseph T., Jr. "Irony and Symbolic Action in James Weldon Johnson's *The Autobiography of an Ex-Coloured Man.*" *American Quarterly* 32 (Winter 1980): 540-58.

Smith, Valerie. "Privilege and Evasion in *The Autobiogaraphy of an Ex-Colored Man.*" *Critical Essays on James Weldon Johnson,* ed. Kenneth M. Price and Lawrence J. Oliver, pp. 88-101. New York: G.K. Hall & Co., 1997.

W.E.B. デュボイス（木島始、鮫島重俊、黄寅秀訳）『黒人のたましい』東京：岩波文庫、1992.

J. W. Johnson, *The Autobiography of an Ex-Coloured Man* and "Double-consciousness"

KOTANI Koji

The present paper is an investigation of the various echoes in *The Autobiography of an Ex-Colured Man* of what W.E.B. Du Bois called black "double-consciousness." J.W. Johnson, the author of the fictional autobiography, narrates the life of a black man who passes the color line between black and white. Du Bois's "double-consciouness" is reflected in the sense of duality not only in the narrative structure of *The Autobiography* but also in the characterization of the protagonist-narrator. The narrator weaves a success story of self-realization through his musical creativity, while his unconscious desire to be a white man undercuts it. His encounter with a lynching makes him give up his alleged ambition to bring honor and fame to the black race by creating black music deeply rooted in folk culture and tradition. Instead, he finally chooses to be white and engages money-making, thereby acquiring "a mess of pottage."

Johnson gives this account of the ex-colored man in the form of simulated autobiography. This act of telling seems to be a kind of ritual and it suggests that he wishes vicariously to be free from the very qualities that he seems to have in common with the ex-colored man. By so doing perhaps Johnson attempts to make a new start for integrating his own "double-consciousness" as a black.